

地歴公民 (日本史)

<全体分析>

試験時間	90分
------	-----

<p>解答形式 論述式と記述式の併用だが、論述式が中心。論述式の解答分量は、解答用紙の行数により指定している。</p> <p>分量・難易 (前年比較) 分量 (減少・やや減少・変化なし・やや増加・増加) 昨年と同様大問4問であった。論述問題は24問から21問、解答行数は42行から34行に減少した。一方、記述問題は、4問から19問に増加した。</p> <p>難易 (易化・やや易化・変化なし・やや難化・難化) 設問間での難易度の差はあるが、全体には昨年とほぼ同じ程度の難易度であった。</p> <p>出題の特徴や昨年との変更点 大問4問構成、問題Ⅰは古代、問題Ⅱは中世・近世初頭、問題Ⅲは近世中心、問題Ⅳは近現代であった。例年、史料・図版・統計表などの諸資料を利用した問題が出題されており、今年も多くの大問で史料や図版を使った問題が出題された。また、問題Ⅲは全体に思考力・判断力に重点を置いており、問2では課題解決の方法を問う新しい傾向の問題が出題された。問題Ⅳ問4では、雑誌の記事に空欄を作り、「あなたがこの記事を書く場合」と設定しての問いが出題された。</p>
--

<大問分析>

番号	出題形式	出題分野・テーマ	コメント (設問内容・答案作成上のポイントなど)	難易度
I	論述式	古代における稲の収取をめぐる動向	問1：問われているのは「規模の特徴」なので、小区画のものが多かった点を述べればよい。 問2：田の面積を単位とした点を述べればよい。 問3：史料2の郡の正倉に着目できれば、正解に近づける。 問4：受験生にとっては表1の読み取りは難しかっただろう。史料3と史料4の関連に気づきたい。 問5：8世紀という時期から戸籍がまだ機能していることに気づきたい。 問6：人を基準とした賦課から耕田の面積を基準とした賦課への変化を述べればよい。	標準 やや易 やや難 やや難 やや難 標準
II	論述式	中世・近世初頭の法・法制度	問1(1)：問題文・設問文を丁寧に読めば分かる。 問1(2)：知行国主と国司との関係から考えたい。 問1(3)：知行国制のあり方から考えたい。 問2(1)：室町幕府の設置場所が問題となっている。 問2(2)：守護使不入地が問題となっている。 問3(1)：法Eを丁寧に読んで解釈したい。 問3(2)：「伊勢の周辺にのみ」とある点などに注目してみる。	やや易 標準 標準 やや易 標準 標準 やや難
III	記述式 論述式	近世後期の対外意識や対外関係をめぐる諸相	問1：全体に基本知識が問われている。 問2：設問の要求の把握が難しかったと思われる。 問3：国際情勢は列強の接近をふまえればよい。 問4：大学の訂正により削除。 問5：中川が長崎奉行であった点から考えたい。 問6：咸臨丸は日米修好通商条約の批准書交換のための使節に随行した船である。	やや易 やや難 やや難 やや難 標準

地歴公民 (日本史)

名古屋大学 文学部、情報学部 (人間・社会情報学科) (前期) 2 / 2

IV	記述式 論述式	近代日本の大陸侵略と戦後経済	問1: エ の後藤新平がやや難度が高い。 問2: 日米関係は悪化し、日露関係は接近する。 問3: 史料の内容を丁寧に反映させ、傀儡国家であることを述べればよい。 問4: 下線部や記事の内容から、真珠湾攻撃について書けばよい。 問5: 区分Bが準戦時賠償としてのODAの対象国であることに気づきたい。 問6: プラザ合意後の円高不況からバブル経済へ至る過程を説明したい。	標準 標準 やや難 標準 難 やや難
----	------------	----------------	---	-----------------------------------

※難易度は5段階「易・やや易・標準・やや難・難」で、当該大学の全統模試入試ランキングを基準として判断しています。

<学習対策>

全体的には標準的な論述問題が中心だが、相当な歴史的理解力・応用力の必要な設問もあり、単純な歴史用語の暗記では対応できない。歴史的な背景や因果関係を常に意識した学習が必要である。また、テーマに対して行数の少ない設問も多いので、設問要求を確実に把握し、簡潔に文章化する表現力の養成も不可欠である。